

は言うまでもない。黄金の四角地帯は、国家を中心に据えた言語学、歴史学などの研究者にとっては辺境であっても、世界システムの周辺に位置するからこそ、しばしば開発援助という目的で国際的な資金が集中的に投入されている地域でもある。もっともこのことを本書が認識していないわけではなかった。実際、「黄金の四角地帯の現状は（中略）関係する四カ国の政治的な思惑も絡み、更には、国際政治の影響も無視できないなど様々な要素の絡んだ地域である」（p. 10）と本書で新谷は述べているからである。しかし、具体的に本書がこの点に踏み込むことはなかった。

本書が刊行されて3年を経た今、評者が本書について論評しているのもこの点と関わっている。すなわち、黄金の四角地帯ではこの3年の間にもますます国際政治の影響が無視できなくなりつつあり、それに応じてその地域の住民がそれぞれの立場で政治行動を起こしている現実もますます露呈しつつある。そうでなければ現地の住民は自分たちが生活していくための権利を保護されない。こうした状況のなか、民族をめぐる政治についての洞察はいっそう必要とされているのである。その観点から本書を振り返れば、本書が黄金の四角地帯に居住する人々のそうした政治的動態にもっと深く焦点を当てていれば、辺境研究の好事家的寄合にとどまることがなかったであろう。一方、今後についていえば、本書の研究の延長がそこを正面から見据えてこそ、国民国家の枠組みに縛られた従来の学問枠組みに対抗する力を発揮し、辺境研究の従来の辺境性から大きな一歩を踏み出すことが

できるのである。

引用文献

リーチ, E.R. 1987. 『高地ビルマの政治体系』 関本照夫訳, 弘文堂. (Leach, E.R. 1970. *Political Systems of Highland Burma*. London: Athlone Press.)

(桒永真佐夫, 国立民族学博物館)

Mary Beth Mills. *Thai Women in the Global Labor Force: Consuming Desires, Contested Selves*. New Brunswick, New Jersey and London: Routgers University Press, 1999, xv+218p.

タイでは輸出型製造業に転換した1970年代以降、女性の移動労働が増加している。首都バンコク周辺には繊維業を中心とした工場が次々に建設され、手先の器用さや時間的余裕から、扶養家族のいない未婚女性が労働力として求められた。周知のように、製造業における「労働力の女性化」は、タイに限られた問題ではない。現在、日本や欧米で消費される繊維製品の多くは中国や東南アジア、あるいは中南米諸国製で、いわゆる「途上国」にとって共通した現象であるといえる。

本書は、この「労働力の女性化」に付随した女性の移動労働について論じた民族誌である。著者のマリー・ベス・ミルズは、アメリカ・メイン州コルビー大学人類学科の準教授である。これまでミルズは、東北タイにおける女性の移動労働について研究を展開し、タイのジェンダー研究に新たな見方を提供し

てきた。本書のもとになる調査は、1987～93年の間にバンコク、およびマハーサラカム県で2年半にわたって実施された。

本書に限らず、ミルズの研究の基本的方向性は、主にバンコク首都圏の工場で働く女性を対象とし、移動先と出身地双方の視点から移動労働を取り上げることにある。タイ女性の移動労働をめぐる議論は少ないが、その多くは統計資料を使ったマクロな分析であり、「貧困世帯の女性が経済的利益のために、生産業や資本主義的規律をとまう外国資本の工場労働に従事する」という説明を繰り返してきた。また、女性自身の境遇を論じる傾向にある近年の研究も、職場での待遇やそこへの適応や抵抗に集中し、移動労働者である女性と出身地や家族との関係は十分に考察されてこなかった。それに対してミルズは、移動労働によって積極的に変化する女性のジェンダー・アイデンティティに注目し、それがグローバルな政治経済的状况における支配や搾取の社会関係を再生産しているという点を強調することを主題としている。

まず、内容を紹介しよう。本書は、9章構成である。まず、第2～5章までで、女性の出身地である東北タイを舞台に、移動労働の動機が検討される。そして、第6～8章までで、移動先のバンコクを舞台に、移動の動機とはかけ離れた現実生活が描かれる。

以下、各章の内容を追って紹介しよう。

序論的な第1章では、ひとりの女性の移動労働と帰省の経験を引用し、移動先、出身地双方における女性の決定 (decision) や選択 (choice) を検討することの重要性が強調され

る。ミルズが最も主張したいのは、女性が移動労働を選択することで、女性自身のジェンダー・アイデンティティが「自立した女性＝近代的な女性」としての再構築へむかうと同時に、その欲求が移動労働の動機のひとつになっているという点である。

第2章では、タイ国内で東北タイという地域、および住民が、社会、経済、文化的に「周縁」として再生産され続けてきたことが示される。この100年程度の間、中央タイとは異なる社会を形成するラオを中心とした東北タイ住民は、経済的統合やマス・メディアを通して、「タイ国民」として編成されると同時に、「中央」に対して「周縁」という位置づけを与えられてきた。

第3章では、その「周縁」化が、移動労働の要因のひとつであることが示される。村落内では現金の重要性が増し、バンコクを起点にしたさまざまな商品が浸透するなかで、その商品やそれに付随したライフスタイルへのイメージや考え方が、「最新の」、「流行の」といった意味をもつ「タン・サマイ (thansamay)」という言葉で表現されている。そしてこうした商品やイメージ、考え方こそが、それを消費したいという男女の野心形成に影響を及ぼし、移動労働につながるとされる。

第4章では、移動労働の動機や意味が男女で異なっていることが、世帯 (household) という場に目を転じて検討される。未婚の男女の移動労働は、男性が宗教的、政治的地位を高めるために自由に移動を繰り返すのに対し、女性は両親に経済的に貢献することで功

徳を積み、世帯の再生産の役割を担うという構図で説明される。つまり、女性は世帯に根ざした「娘」としての義務と、「タン・サマイ」的な自己の実現の双方を可能にするために移動労働を選択するという。

自己実現といった点からさらに移動労働を検討した第5章では、流行の装飾品を身に付け、友人と最新のレストランやバーで飲食をするなど、経済的、精神的に世帯から自立した生活が「タン・サマイ」的とされる。そのイメージはテレビドラマや広告などのマス・メディアを通して、バンコクを中心とした「中央」からタイ国内の隅々にまで浸透する。このマス・メディアに登場する「タン・サマイ」的なイメージが、主に女性を媒体としており、それを消費したいという欲求が女性の間に広まりやすく、その手段として移動労働が選択されるのだという。

第6章からは、舞台がバンコクへと広げられる。まず、非熟練労働者である女性は、主に家事補助や小規模店舗、工場などの低賃金労働に従事し、憧れである「タン・サマイ」的な生活が、低賃金労働者である自分には享受できないものであることを認識するという。女性は短期間でより賃金の多い職へと転職する傾向にあるが、その収入は自らの生計を維持できる程度のものである。第7章では、低賃金収入のなかで、「タン・サマイ」的な生活を消費しようとする女性の困難が示される。「娘」の義務として両親へ送金をすれば、「タン・サマイ」的な自己実現のために投資する額はほとんど残らない。しかし、送金を怠れば、「娘」として両親や親族に顔

向けができなくなる。その間で女性は揺れ動き、その解決策として、流行の商品と類似した安価な商品を市場で購入したり、友人と連れ立って外出することで「タン・サマイ」的な自己を消費しようとするという。この友人らと外出するという行為をさらに男女の関係から検討した第8章では、女性の性に対する考え方や選択の変化に焦点が当てられる。

都市で働く移動労働者は村落とは異なり、両親の管理から解放されて自由に恋愛をすることができる。男性とふたりで出かけたり、性交渉をめぐる駆引きなど、そこには性に対する規範の揺らぎが見出せる。すなわち、移動労働者にとって「娘」としての義務とあいまった「タン・サマイ」的な自己の実現は、若い世代の性規範やその選択に変化の契機を与え得るという。

結論としての第9章では、本書の扱った事例がタイ特有のものではなく、急速な産業化を経験する地域において「労働力の女性化」を生み出す論理であることが示される。安価な労働力である未婚女性は、近代性のイデオロギーを消費することを通して、自らのジェンダー・アイデンティティを再構築させようとするからである。女性は「近代」的な自己実現のために、低賃金労働である移動労働を選択する。しかし、何よりもその低賃金のために、「タン・サマイ」的な自己の実現は難しい。それでも、自己実現のために女性はより高収入の職を求め、商品を購入しようとする。そうした「近代」的な自己のイメージが吸引力となり、移動労働を行う未婚女性は後を絶たず、不均衡な経済構造は再生産され続

けるという。すなわちミルズは、女性による安価な労働力やそれを統制する規律の再生産に、近代性のイデオロギーや女性自身のジェンダー・アイデンティティが重要な役割を担っているということを示唆し本論を終えている。

本書は、それまで性産業従事者に偏っていたタイ女性のイメージを、あえて性産業従事者以外の女性を中心に議論を進めることで払拭している。また、女性の移動労働を、移動先だけでなく、出身地にまで広げて考察しようとしている。しかし、本書は出身地と移動者との関係を十分に捉えているのだろうか。評者は、ミルズが強調してきた「タン・サマイ」という言葉をめぐる議論に注目し、いくつかの批判を挙げることで、本書がタイ社会の動態的理解へ向けてもつ意義を考えたい。

まず、本書で強調される「タン・サマイ」という言葉が、詳細な検討のないまま「タイの近代性」(Thai Modernity)として概念化されていることに疑問が残る。ミルズは、「タン・サマイ」的な商品やイメージを消費しようとする女性が移動労働を選択し、より「タン・サマイ」的な自己を構築する方向に向かうという。しかし、平井も指摘するように[平井 2001: 239],「タン・サマイ」をそのまま分析概念である「近代性」と言いかえてしまってよいものだろうか。ミルズは、「タン・サマイ」の指し示す商品やイメージ、考え方などの内容こそ言及してはいるが、実際にそれが女性の生活する場で、どのような用いられ方をしているのかにはほとんど触れていない。それゆえ、女性が自立し、新しい自

己を確立しようとするのが、そもそも「タン・サマイ」的であると認識されているのかどうか疑わしい。つまり、ミルズは、女性の決定や選択を強調することで、ある種の近代的自己というものを最初から前提としており、タイ的な「近代性」、あるいは「タン・サマイ」とは何かという問いには答えようとしていない。

つぎに、もう一度本書の主題目を思い出してみよう。ここで注目する必要があるのは、出身地と移動者との関係を強調していたミルズが、「東北タイ女性」ではなく、「タイ女性」と銘打っていることである。また、各章の題目には「ローカル」(local)や「村」(village)という用語は出てくるものの、「東北タイ」という表記はみあたらない。ここで使用される「ローカル」や「村」は、あくまで「グローバル」や「国家」に対置するものであり、東北タイの現状は、その対比を成立させるための「地方」の代表にすぎないからである。すなわち、ミルズは、労働市場の拡大や賃金格差によって説明されてきた移動労働の議論に、「地方」の文脈における男女の差異や親子関係から生み出される移動労働の社会、文化的意味を加えたことになる。しかし、それはあくまで「グローバル」に支配された「ローカル」という前提のなかで議論されたものである。移動労働によって接近せざるをえない「近代性」や、それによって競合されるジェンダー・アイデンティティこそローカルな文脈に位置づけて考えていかなければならないはずが、「グローバル」と「ローカル」という二項対立のなかに巻き込まれ、

従来の議論の塗り直しにとどまっている。

いずれにせよ、中央から発せられる商品やイメージの浸透は新たな現象であると同時に、無視できないほど人々の生活に密着している。その点に注目したことで本書は、ミルズの意図かどうかは別にして、タイ社会の動態性を理解する足がかりを提示している。今後は、移動労働によってもたらされる財やモノを、各地域の、どういった人々が、当該地域の文脈においてどのように捉え、日々の生活のなかに取り込んでいくのかという点こそ明確にしなければならない。本書の議論を足がかりとして、本書を批判的に継承した新たな研究の展開を望みたい。

引用文献

平井京之介. 2001. 「北タイ女性工場労働者とタン・サマイ言説—「近代性」への民族誌的アプローチ」『国立民族学博物館研究報告』26 (2): 237-257.

Mills, Mary Beth. 1993. *"We Are Not Like Our Mothers": Migrants, Modernity, and Identity in Northeast Thailand*. Ph. D. Dissertation. Berkeley: University of California Press.

(木曾恵子, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Ralph H. Magnus and Eden Naby.
Afghanistan: Mullah, Marx, and Mujahid.
Colorado and Oxford: Westview Press,
2000, 286p.

2001年9月11日の同時多発テロ以前、アフガニスタンは「忘れ去られた国」であっ

た。しかし、あの日を境に、一躍世界の注目を集めることとなった。日本でも、アフガニスタン、あるいはより広くイスラーム世界の動向についての情報が求められるようになった。当初は、テレビや週刊誌において、基本的な事実誤認、あるいは自論に引きつけるための強引な議論が幅を利かせていたが、次第に問題をより深く認識するための契機となる論集が、地域研究者によって刊行されるようになったことは、歓迎すべきことである（たとえば、[広瀬・堀本 2002; 板垣 2002]）。

映画「カンダハール」に対する注目からもわかるように、「未知の国」であるアフガニスタンへの関心は高い。しかしながら、実際のアフガニスタン研究は、ほとんど手つかずのままである。9.11以降に発表された論考の多くは、現地体験をもたない研究者によって発表されてきた。「アフガン特需」に乗ったマスメディアや出版業界からの要請に、どちらかと言えば引っ張られる形で、パキスタンや中央アジアといった周辺地域を対象とする研究者が、アフガニスタンに関する「知的真空状態」を埋めるべく作業をしてきたのである。もちろんその努力は真摯なものだが、このような研究が臨時操業的なものであることは否定しようがない。報道が一段落した現在こそ、地道な基礎研究が求められているのではないだろうか。地域研究にとって、アフガニスタンが「空爆の前後のみの存在」となってしまっただけではない。

ここで紹介する *Afghanistan: Mullah, Marx, and Mujahid* は、地理や民族関係にも触れながら近現代史をコンパクトに記述しており、